大学実践

金沢大学の「スーパーグローバル人材」育成戦略

金沢大学 教育担当理事（副学長）柴田正良

金沢大学では、知識基盤社会の中核的リーダーを輩出し、日本のグローバル化を牽引していく大学を目指しています。本学が考えるグローバル人材育成と大学改革の取り組みについて紹介します。

人材育成方針を策定し共通教育改革を徹底

本学では、学士・修士・博士すべての課程で教育の国際化を推進しています。2014年度に文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）」の指定大学となったことなどをきっかけに、学生への海外留学支援や英語による授業の充実などに一層の力を入れています。そこで、全学が一体となって教育の国際化・高度化に対応するために、独自の人材育成方針「金沢大学〈グローバル〉スタンダード（KUGS）」を策定しました。KUGSは、本学が今後何を目指して教育改革を進めていくのか、その方向性を具体的に示すものです。例えば、学生に重点的に定着させたい５つの力として、「自己の立ち位置を知る」「自己を知り、自己を鍛える」「考え・価値観を表現する」「世界とつながる」「未来の課題に取り組む」を掲げています。

カリキュラムも、KUGSに基づいて再編成しました。例えば、学士課程１年生全員が学ぶ共通科目は、以前はテーマも内容も異なる約300もの科目に分かれていましたが、今では30の「GS科目」に再編されています。いずれのGS科目も、KUGSの示す５つの力の育成に特化したもので、５群各６科目から成ります。さらに、担当教員によって授業内容に基本的な点で違いが出ないように、GS科目で用いる教科書も統一しています。GS科目は選択必修科目なので、どの学生も入学当初からKUGSの理念に対する理解を深めることができると考えています。

４技能の育成に特化した英語科目を創設

学生の国際的なコミュニケーション力を高めるために、授業を英語で行うことも重視しています。2023年までには、全学の学士課程平均で半分の授業、修士・博士課程で原則としてすべての授業を英語で行うことを目指しています。英語で授業ができる教員を増やそうと、近年は教員の新規採用基準に「英語で授業ができること」を加え、最終面接では英語による模擬授業を行ってもらっています。ただ、授業の英語化を推進していくためには、これまで日本語で授業をしてきた従来の教員の理解と協力が欠かせません。そこで、教材のみ英語、学生のグループワークのみ英語など、部分的に英語を用いる授業も歓迎しますと、先生方に呼びかけています。一部の教員だけでなく、どの教員も英語による授業に取り組むことこそ、教育の国際化の第一歩だと私は考えています。

授業をどれほど英語化しても、学生がついてこられなくては仕方がありませんから、学生の４技能を総合的に育成できるように、英語科目の改革も進めてきました。2016年度には、従来主流だったリーディング中心の内容を改め、４技能の向上を目指す２つの英語科目を新設しました。１つは外部検定試験で問われるスキルを伸ばすための科目。もう１つは、英語による授業を理解できるようになるために、基礎的な言葉のやりとりや学術用語などを学ぶ科

目です。２科目ともにオールイングリッシュで行われます。

グローバル人材の素質を求め外部検定試験を入試にも活用

英語で学んだり、発信したりできる入学者を迎え入れるために、入試においても外部検定試験の活用を推進しています。

外部検定試験は、人間社会学域国際学類で2016年度入試に導入しましたが、2017年度入試からはスピーキングやライティングの力を測定できないものは対象外とし、GTEC CBT など４技能の外部検定試験に限定して指定します。そして2018年度入試からは、人間社会学域、理工学域、医薬保健学域の全学域に拡大していきます。2023年に学士課程の50％を英語で授業することを目指す本学としては、入試でも４技能の英語力を今まで以上に重視していくことは当然のことです。

海外留学支援の一環としてクォーター制を導入

SGU の指定大学となったことで、本学独自の海外留学プログラムなどを充実させるとともに、留学しやすい環境整備も進めています。例えば、2016年度に導入したクォーター制です。従来の前期・後期制では、学年暦の異なる国に留学した学生が、帰国後、本学での科目登録に間に合わず、留年してしまうケースがありました。そこで、おおよそ、４～５月を第１クォーター、６～７月を第２クォーター、10～11月を第３クォーター、12～２月を第４クォーターとし、クォーターごとの科目登録を可能にしました。これにより、例えば５月に帰国した学生でも、第２クォーター以降の科目を履修し、単位が取得できるようになります。海外で学ぼうとする学生の意欲を後押ししたいという考えです。また、クォーター制を採用する国からの留学生を、本学に多く迎え入れることにもつながると期待しています。

一連の改革の成果はすでに学生の日々の姿にも表れており、何事にも率先して取り組む学生が増えていると感じています。例えば、海外留学を経験して戻ってきた学生・院生の中には、留学で得られた気づきや学びを仲間たちに紹介し、留学のための説明会などを自主的に開催している者もいます。

大学入試改革は教育の国際化の好機

現在全国的に進められている大学入試改革は、国際化を軸とする教育改革をさらに推進する好機だと、本学では位置づけています。それは、先ほどお話しした、英語の外部検定試験の入試への活用推進によっても、お分かりいただけると思います。

文部科学省の高大接続システム改革会議の最終報告では、「多面的・総合的評価」の重要性が強調されています。本学が育成に努めているグローバル人材は、知識だけでなく、さまざまな経験に裏打ちされた広い視野を持つ人材です。そのため本学は、知識偏重の従来の入試から「多面的・総合的評価」が可能な入試への変革に大いに賛同し、「多面的・総合的評価」の具体化に向けて動き出しています。

例えば2018年度には、「文系一括・理系一括」の入試を始めます。学類ごとではなく、文系の学域全体、理系の２学域全体という単位で選抜することで、多様な志望や興味を抱く入学者を迎え入れ、より幅広い視野を持つ人材を育成したいと考えています。この入試での入学者は、入学後、専門知識を持つアカデミック・アドバイザーの指導のもと、自身の専攻する分野を１年間じっくりと検討して学類を選択し、２年生から希望の学類に所属します。さらに、「KUGS 特別入試」も2020年度に導入します。この入試では、高校生の主体性・多様性・協働性を見極めるために、全国の高校生対象の「KUGS 特別セミナー」、KUGS に関連した実習や実験に加え、学力評価テストなどによって段階的に選抜します。

ただ、「多面的・総合的評価」の実現には、人手や予算などの面で課題があることも事実です。これは、多くの大学に共通する課題でしょう。そのため、大学入試改革を実りあるものにするには、国が大学に努力を求めるだけでなく、国による大学への支援も充実させてもらう必要があると、私は考えています。

また、大学の教育改革は、学外と連携して取り組むことが重要です。例えば、小・中学校を含めた小中高大接続や産学連携の工夫によっても、さらなる成果が期待できるようになるでしょう。

グローバル人材は、大きな可能性を秘めています。例えば、世界を見据える広い視野から検討することで、地域の課題を発見し、新たな解決策をもたらすこともできます。また逆に、地方から日本を変えることも、アジアから世界を変えることもできます。その意味で地方にも世界にも貢献できる人材の育成に向け、今後とも全力を尽くしたいと考えています。